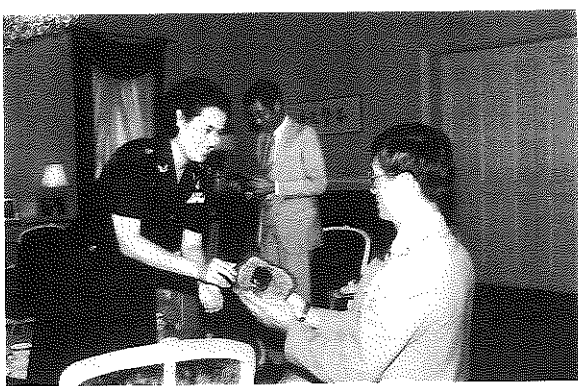


タイ国の旧日本陸軍最後の 防御陣地跡と士官学校 記念置き時計

渡邊 榮樹 陸自69

2017年10月26日に故ラーマ9世前タイ国王の荼毘の儀が、首都バンコク王宮前広場において、執り行われしました。テレビの画面に王宮前広場に向かう葬列の中に、シリントーン第2王女のお姿をお見掛けいたしました。久しぶりに拝見する王女は、白髪が目立つようになりましたが、約30年前のバンコクでの防衛駐在官時代に、王女にお会いしたことを、懐かしく思い出



シリントーン王女から士官学校記念置き時計を下賜される。

ました。

1989年(平成元年)9月、大使館大使執務室において、岡崎久彦大使(当時)から、「シリントーン王女からご下問があり、先の大戦に構築されたナコンナヨクの旧日本陸軍の防御陣地について、調べてくれないか」と命ぜられました。王女は、現在でも大変人気がありますが、当時は陸軍士官学校の歴史教官でもありました。その陸軍士官学校は、ラーマ5世が1887年に王宮内に創設して以来100年の伝統を持つバンコクから、その北東約140kmのナコンナヨクの広大な近代

軍士官学校の裏山を訪れました。士官学校関係者に案内された地区には、すでに40年以上経った露天の掩体及び交通壕の跡と見えなくもない溝が、山腹に伸びておりました。掩体らしき壕に入って、前方を眺めました。ジャングルの中で、それが防御陣地の一部と確定はできませんでした。雨季末期ののなか壕に入って、強く感じたことは、当時東南アジア唯一の独立国のこの地区が、日本軍の戦いのために戦場にならなくて本当によかったということでした。

的キャンパスへ、移駐して3年経ったばかりでした。その新しい士官学校キャンパスの後背山地に旧日本軍の防御陣地が、構築されていたのです。昭和20年5月1日、連合軍によるピルマ(現ミャンマー)首都(当時)ラングーン(現ヤンゴン)奪還にともない、タイ王国が日本国防圏の西正面防衛の第一線になりました。泰国駐屯軍である第39軍の司令官中村明人中将は、バンコクを直接防御するため、ナコンナヨクに、最小限3カ月の持久作戦を遂行しうる1個師団防衛陣地を核とする軍の複郭陣地構築を計画。6月上旬に辻政信大佐が、作戰主任参謀として着任するや、陣地構築が開始されました。

王女のご下問に対する回答として、陣地構築の経緯の概要と防御陣地の程度として、資材準備不足のなか、6月下旬は、すでに雨季に入っており、約1カ月の準備では、道路の建設及び重要地域の塹壕の一部の工事だけに終わったものと推測される旨、とりまじめ、大使に報告いたしました。

中村中将の回想録、戦史叢書等を資料として、さらに現地確認のため、陸

翌年1990年に、シリントーン王女が、訪日前に、大使公邸に来訪され、催された昼食会に陪席の機会を得ました。会食の中で王女は、歴史教官として、新しい士官学校所在地のナコンナヨクに、日本陸軍が駐屯していたことに関心を持たれ、士官学校周辺の現地調査をなされた旨お話をされました。「日本軍は、防御準備中に終戦を迎え、約7万人もの大勢力であったにもかかわらず、整齊と武装解除に応じ、そのまま駐屯地区が、日本軍捕虜の収

容所となりました。聞き取り調査では、地元村民から、日本軍滞在に対する非難の声もなく、トラブルも見られず、非常に良い関係であったということに構築していたか関心を持ちました」と、話されました。

会食後、王女から、記念に、士官学校建設中に産出した赤大理石で作成の士官学校記念置き時計を拝受致しましたが、「但し、時計の機械は、メイド・イン・ジャパンです」と、はにかむ王女が、とても印象的でした。

タイ国内へ進出してきた連合軍との交戦となれば、地元住民に多大な被害を及ぼしたことは予想できます。陣地構築を予定した山中には、有名な世界自然遺産カオヤイ国立公園があります。連合軍の圧倒的な空爆を受ければ、自然の美しい景観が残されなかつたかもしれません。

戦いを未然に防いだ、泰国駐屯軍司令官中村中将の「長い目で日タイ関係を見ると、相互に戦争や占領という汚点は、残すべきではない」とする強い理念と統率が、ラーマ9世から信頼され、「ほとけの司令官」とタイ国民からも慕われ、現在のタイ日の親密な友好関係の基となり、士官学校の建設にも良い影響を及ぼしたのではないでしょうか。

記念の置き時計は、今も自宅居間の書棚で時を刻んでおります。